

3-1編集企画体制への道(3)

企画力、編集力、出版力(下)まとめ

代表取締役 吉田 隆

去る8月9日に発生した関電美浜原発事故の詳細を全国紙の報道で知った多くの同業社が、夏期休暇の合間を縫い新企画に取り組んだことだろう。こうした報道に触れた時、しばしば思い起すのはフジテク在職時に耳にした「俺たちはジャーナリストの端くれだ」という小野社長の言葉である。その言葉の先には、取材と批評精神をおろそかにするなという無言の教えがあった。最新の社会性のあるテーマに間髪をいれずに取り組みというわけである。企画力の停滞傾向を招く真の要因は、編集企画部の動きが全体としてどちらかと言えば企画より制作志向であるためだと思う。しかし、出版社共通の課題でもあるだろうが、ヒット商品を生み出し、収益を安定化し、社会のニーズに応え続ける道は容易ではない。対人交渉が基本の企画力と、デスクワークが基本の制作力とでは、仕事のベクトルもスタッフに求められる資質、素養も異なる上、どちらかといえば、時代によらず企画より制作タイプの人が多数であるように思えるからである。以下に、企画力、編集力向上のためのいくつかの課題を取り上げ、本稿のまとめとする。

①素読みのスキルアップ

出版物には奥付ページに各工程の責任者が明記される。最近の例で、「新訂版・表面科学の基礎と応用」では、制作担当者として編集プロダクション名が表記され、原稿整理等の制作工程に問題が生じた場合の責任の所在を明確化している。奥付に表記されると、当該工程の技術と責任を代表するため、原則として担当者以外のスタッフはその工程に手出しはできない。ただ、届いた原稿を制作者に渡す前に、企画担当はその原稿を素読みするが、そこでの生産性が全体の工程を大きく左右する。つつい原稿を読み込んでしまう結果、手離れが悪くなるのである。素読

み速度の目標は、1日当たり300ページ、3日で1000ページほどである。しかし、読みと素読みの間の境界線は明確でなく、標準化も困難であるため、担当者の自覚とスキルアップに加え、制作を担当する編集プロや印刷所のレベルに一定の基準を設け、内部負担を軽減することも肝要である。

②企画提案力の強化

現在、月1回の企画会議に上がってくる新規提案企画は年間40テーマほどで、その内30テーマほどが採択される。部員数はブッカーズ社を合わせて13名なので、一人あたりの平均提案数は年間3アイテム弱である。過去、3、4名のリーダーのみが企画を提案する体制であったが、それでも採択数との比較から、選択の幅が少なすぎる。人文系だが、社員数百人規模の某出版社では、企画会議に常時1000テーマほどがプールされ、社会の変化に速やかに対応する体制を敷いていると聞いた。今後、企画提案を行うグループ夫々が、毎月企画会議を行い、各グループ内でふるいにかかったものが、リーダーによる企画会議に提案され、そこでは最低でも常時100テーマが用意されているくらいでなければ社会の変化にフレキシブルであるとはいえないだろう。全員参加型の編集企画体制が20期以降の目標である。従来、大型本の進行管理のみを専門としてきたスタッフも、大型本に加え、中規模書籍、資料集などへの多様性への移行期の中で、自ら企画を担当する機会が増えることを自覚したい。

③企画の数値目標化

20期は、編集企画部の発刊書籍の総ページ数は、部員一人当たり約1000ページと、ここ数年一定しているが、私の経験から言って少し寂しい数字である。紙面の都合で多くを語れないが、単純にページ数だけで比較すると、一人当たりの生産性で他社と3倍程の開きがある。しかし、1000

ページ超の大型本の場合、数度の編集会議、数百名の執筆者数、必ずしもポピュラーではない査読工程の採用、索引の充実など、読者ニーズに応えるためのハイレベルの内容、品質確保へ向けて多くの時間とエネルギーを投入していることも事実である。また、講演録はテープ起しの過程で著者や担当者に多大の負担をかけるなど、単純にページ数だけで生産性を計れない要素もある。そうした事情を踏まえても、大型本の汎用ニーズに加え、新規性、速報性への読者ニーズに応えることで、収益の安定化を図るためには、現在の生産性を2倍近くに引き上げる努力が求められる。つまり、部員一人当たり約2000ページ、500ページほどの書籍なら年間4冊がまずは当面の目標である。今後、個々人の売上年間目標も設定する必要があるだろう。

④めざす編集企画体制

～メッセージ力の強化

辞書によれば、ジャーナリズムは、定期的な刊行物により時事的な情報・意見を大衆に伝達する活動と定義される(「岩波国語辞典」)。大マスコミのみならず雑誌社も出版社も、研究室であれ工場であれ新しい発見、事件に直面すれば、関係者にインタビューを試み、現場に足を運ぶ。そして、様々な情報源を頼りに自分なりの視点で発見や事件の真相に迫りそれを読者に伝えようとする。それより多少柔らかいエディターという言葉からも、現場や批評精神という意味合いを完全に払拭(ふっしょく)することは出来ないはずである。要するに、出版社の一員であるということは、社会にメッセージを発信することが義務付けられるということである。何のための編集企画部員かということ各人が自覚し、企画力、編集力を磨き、自己表現に努め、その証(あかし)でもある人間力、出版力を感じさせる編集企画体制がめざす理想である。

●編集後記

記録的な猛暑と、オリンピックのニュースが列島を騒がせていた夏が過ぎ、九月。次男が幼稚園の時「お母さん、今日お月見なんだって。お団子作ってもらって食べなさいって先生言ってた。」そう言いながら、送迎バスを降りてきた。早速食材を買い求め、二人でお団子を丸める。「一つ、二つ…十四、十五」空き地からスキを取ってきて、窓際に小さなテーブルを出し、お団子に添える。「お母さん、早く食べたよ〜」そんな時も我が子にあったんだなんて思い出にふけったりしている。夜空にぼっかり浮かぶ月は、子供にはやっぱりウサギがいるんだろうかなんて思わせるほど、きれいだった。月日のたつのは、早いし恐ろしい。今、その息子はリビングの鴨居に頭をぶつけながら、「お母さん、お帰り。今日の夕飯何?」となつてくる。でもさすがにいまどきの子。パソコン、インターネット情報はかなわない。両親までも、ライバル意識を持ちパソコンを購入、いろいろと試行錯誤しているようだ。スキンシップのある会話ができるブロードバンドを目指す小池先生のお話し。時代に遅れないようにしなくっちゃ。(あしだ)

●編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。
〒113-8755 東京都文京区湯島2-16-16 (株)エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX: 03-3814-9152 E-mail: k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース

2004年9月号(通巻67号)
2004年9月3日発行